14　次の文章は『落窪物語』の一節である。落窪の君は源中納言の娘で、高貴な実母とは死別し、にいじめられて育ったが、ひそかにと結婚して引き取られて、幸福に暮らしている。少将だった道頼は今では中納言に昇進し、衛門督を兼任している。以下は、道頼が継母たちに報復する場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。　　　　　〈東京大〉二〇二一年度出題

　かくて、「今年のの祭、いとをかしからむ」と言へば、の殿、  
「アさうざうしきに、に物見せむ」とて、かねてより御車新しく調じ、人々のどもびて、「よろしうせよ」とのたまひて、いそぎて、その日になりて、一条のの打たせ給へれば、「今は」と言へども、イ誰ばかりかは取らむと思して、のどかに出で給ふ。

　御車五つばかり、大人二十人、二つは、童四人、四人乗りたり。男君具し給へれば、、四位五位、いと多かり。の侍従なりしは今は少将、童におはせしは、ウ 「もろともに見む」と聞こえ給ひければ、皆おはしたりける車どもさへはりたれば、あまり引き続きて、皆、次第どもに立ちにけりと見おはするに、わが杭したる所の向かひに、古めかしき一つ、一つ立てり。

　御車立つるに、「男車の交じらひも、き人にはあらで、親しう立て合はせて、しの北南に立てよ」とのたまへば、「この向かひなる車、少し引きらせよ。御車立てさせむ」と言ふに、エしふねがりて聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせ給ふに、「源中納言殿」と申せば、君、「中納言のにもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかでこの打杭ありと見ながらは立てつるぞ。少し引き遣らせよ」とのたまはすれば、ども寄りて車に手をかくれば、車の人出で来て、「など、またたちのかうする。いたうる雑色かな。だつるわが殿も、中納言におはしますや。オ一条の大路も皆領じ給ふべきか。強法す」と笑ふ。「、斎院もおぢて、き道しておはすべかなるは」と、口しき男また言へば、「同じものと、カ殿を一つ口にな言ひそ」などいさかひて、えとみに引き遣らねば、男君たちの御車ども、まだえ立てず。君、御前の人、のを召して、「かれ、ひて、少し遠くなせ」とのたまへば、近く寄りて、ただ引きに引き遣らす。男ども少なくて、えふと引きとどめず。御前、三四人ありけれど、「なし。この、いさかひしつべかめり。ただ今の太政大臣の尻は蹴るとも、キこの殿の牛飼ひに手触れてむや」と言ひて、人の家のに入りて立てり。目をはつかに見出して見る。

　少し早う恐ろしきものに世に思はれ給へれど、の御心は、いとなつかしう、のどかになむおはしける。

〔注〕　○賀茂の祭――陰暦四月に行われる賀茂神社の祭。斎院のがある。祭。

○打杭――打ち込んで立てる杭。ここでは、車を停める場所を確保するための杭。

○御前――車列の先払いをする供の人。

○侍従なりしは今は少将、童におはせしは兵衛佐――それぞれ昇進したということ。

○次第どもに――身分の順に整然と。

○檳榔毛一つ、網代一つ――いずれも牛車の種類。「檳榔毛」は上流貴族の常用、「網代」は上流貴族の略式用。

○見渡しの北南に――互いに見えるように、一条大路の北側と南側に。

○雑色――雑役をする従者。

○真人たち――あなたたち。

○豪家だつるわが殿――権門らしく振舞う、あなたたちのご主人。

○強法――横暴なこと。

○左衛門の蔵人――落窪の君の侍女の夫、。道頼と落窪の君の結婚に尽力した。

○人の家の門に入りて――牛車から離れて、よその家の門に入って。

問１　傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

問２　「しふねがりて聞かぬに」（傍線部エ）とは誰がどうしたのか、説明せよ。

問３　「一条の大路も皆領じ給ふべきか」（傍線部オ）とはどういうことか、主語を補って現代語訳せよ。

問４　「殿を一つ口にな言ひそ」（傍線部カ）とはどういうことか、「一つ口」の内容を明らかにして説明せよ。

◎問５　「この殿の牛飼ひに手触れてむや」（傍線部キ）とは誰をどのように評価したものか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝Ａ物寂しいので、Ｂ女房たちに Ｃ賀茂の祭りを見せＤよう

Ａ＝４〔「～ので」「～から」でなければ減点２。〕

Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝２

イ＝Ａ誰ほどの者もＢ確保した場所を Ｃ横取りするまい、とＤお思いになって

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「ばかり」の訳出がないものは減点１。〕

Ｂ＝２／Ｃ＝４〔反語のニュアンスがないものは全体０。〕

Ｄ＝２〔尊敬のニュアンスがないものは不可。〕

ウ＝「一緒にＡ祭りを見よう」とＢ申し上げ Ｃなさっ Ｄた Ｅので

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝２／Ｅ＝２

問２　Ａ源中納言の従者が、Ｂ強情に Ｃ牛車の移動を Ｄ承知しなかった。

Ａ＝２〔なければ全体０。〕／Ｂ＝３／Ｃ＝２

Ｄ＝３〔「聞き入れない」も可。「聞かない」は０。〕

問３　Ａ衛門督は一条大路もＢすべて Ｃお治めになろう Ｄというのか

Ａ＝２〔なければ全体０。〕／Ｂ＝１

Ｃ＝３〔「領有する」「思いのままにする」も可。尊敬の訳出のないものは減点２。〕

Ｄ＝４〔反語のニュアンスがないものは全体０。〕

問４　Ａ同じ位であっても Ｂ衛門督を Ｃ源中納言と Ｄ同列に扱うなということ。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝３〔「位」は「官職」「中納言」などでも可。〕

Ｂ＝３〔「衛門督」は「我が主人」などでも可。〕

Ｃ＝３／Ｄ＝１

問５　Ａ衛門督を、Ｂその卑しい家来にさえ手が出せないほどＡ権勢があると評価した。

Ａがなければ全体０。

Ａ＝６

Ｂ＝４〔「卑しい家来」は「牛飼い」でも可。〕

【現代語訳】

　そうして、（人々が）「今年の賀茂の祭りは、たいそう立派であろう」と言うので、衛門督の殿は、「問１ア物寂しいので、女房たちに賀茂の祭りを見せよう」と言って、前もって御牛車を新しく準備し、女房たちの装束もお与えになって、「見苦しくないようにしなさい」とおっしゃって、仕度をして、その（祭りの）日になって、一条の大路の打杭をお打たせになっていたので、（周りの者は）「今から（出かけましょう）」と言うのであるが、（衛門督は）問１イ誰ほどの者も確保した場所を横取りするまいとお思いになって、ゆっくりとお出かけになる。

　御牛車五台ほどに、女房二十人（が乗って）、（別の）二台には、童が四人と、下仕えの者が四人乗っている。男君（＝衛門督）が（それらの人々を）お連れになっているので、先払いには、四位五位の人々が、大勢いる。弟の侍従であった者は今は少将、童でいらっしゃった者は（となっていて）、（彼らが衛門督に）問１ウ「一緒に（祭りを）見よう」と申し上げなさったので、（誘いにのって）いらっしゃった牛車までもがみな（一行に）加わったので、二十台余りが引き続いて、みな、身分の順に整然と立ち並んでいることよと（衛門督が）ご覧になっていると、自分が杭を打ったところの向かい側に、古風な檳榔毛の牛車一台と、網代車が一台停まっている。

　（衛門督は）御牛車を停めるときに、「男の乗った牛車の配車も、（お互い）疎い関係の人ではないのだから、親しく並び合わせて、互いに見えるように一条大路の北側と南側に停めよ」とおっしゃるので、（衛門督の従者が）「この向かいにある牛車を、少し引き退けさせよ。（衛門督の）牛車を停めさせよう」と言うが、（相手の牛車の従者は）強情に（牛車の移動を）承知しないので、「誰の牛車か」と（衛門督が）お尋ねになると、「源中納言殿」と申すので、君（＝衛門督）が、「中納言の（牛車）であろうが、大納言の（牛車）であろうが、これほどに（見物場所が）多いところで、どうして打杭があると見えているのに（牛車を）停めたのか。少し引きのけさせよ」とおっしゃったところ、（衛門督の）従者たちが寄っていって（源中納言の）牛車に手をかけたので、（源中納言の）牛車の従者たちが出て来て、「どうして、またあなたたちはこのようなことをするのか。たいそう血気盛んな従者たちであることよ。権門らしく振る舞うあなたたちのご主人も、（我が殿と同じ）中納言でいらっしゃるのだぞ。問３（衛門督は）一条大路もすべてお治めになろうというのか。横暴なことをする」と笑う。「西（の上皇）も東（の東宮）も、斎院（＝賀茂神社に奉仕する皇女。賀茂の祭りの主催者に当たる）も（我が主人の御威光に）怖じ気づいて、道をお譲りになるのだぞ」と、口の悪い男がまた言うと、「同じ位であると、衛門督を（源中納言と）同列に扱うな」などと言い争って、すぐには引き退くことができないので、男君（＝衛門督）たちの御牛車は、まだ停めることはできない。衛門督は、先払いの者と、佐衛門の蔵人を呼び寄せて、「あれを、処理して、少し遠ざけよ」とおっしゃるので、（源中納言の牛車に）近く寄って、強引に引きに引いて立ち退かせる。（源中納言側の）男たちは少なくて、とても引き止められない。先払いが、三、四人いたが、「（争っても）無駄だ。今回は、喧嘩になりそうだ。ただ今の太政大臣の尻を蹴ったとしても、この殿（＝衛門督）の牛飼いに手を出せようか」と言って、（牛車から離れて、）よその家の門に入って立っている。目はわずかに外に向けて（祭りを）見る。

　（衛門督は）少し気が短く恐ろしい人だと世間に思われなさっているが、本当のご気性は、たいそう親しみやすく、穏やかでいらっしゃるのであった。